

イエ・出自・女性

——東インドネシア・チモール島テートゥム族の実例から——

遠 藤 史

従来の東インドネシア研究では、男性／女性の問題は、二元論的シンボリズム——対立項——と結びつけて展開されることが多かったと言えよう。女性自体を扱った論文は極めて少ないが、例えばルネ・ヴァレリや鍵谷明子の仕事〔Valeri 1977、鍵谷 1982〕がある。ヴァレリの論文は男／女の分業、儀礼上の役割の差異などについて触れており、貴重である。本稿では、⁽¹⁾当地域で重要な社会単位であるイエと男性／女性の関係、及びそれに関連して、「出自」という用語が、東インドネシアの社会組織を記述するのに適当かどうかという問題について、簡単なスケッチを行なってみたいと思う。

チモール島中部に居住する、オーストロネシア語族に分類されるテートゥム (Tetum) 族 (言語集団) は、東部・北部・南部の三地域に区分され、東部テートゥムは「父系」〔Hicks 1976: 72〕、北部・南部テートゥムは「母系」〔Friedberg 1978: 150〕と報告されてきた。

問題は、「父系」、「母系」と表現されたとき、研究者が当該社会について共通の理解を得られるか否かである。社会人類学の学説上でも「出自」は多くの論争を生んできた。最近清水昭俊は「出自」概念の整理・検討を行なっている〔清水 1985〕。本稿でそれらに理論的考察を加えることはできないが、考える素材の一つを提供したい。

先の南部テートゥムの「母系出自」について、ノルトホルトはそれが母方居住の累積した結果だとみなしている〔Nordholt 1971: 131—132〕。彼はさらに、北部テートゥムを調査したフランシロン (Francillon) の私信を紹介している。「この非単系システムは、実は男性が妻を彼の実家に連れてくることによって、父親としての権利を買うことができる可能性が常に開かれている母系である」〔Nordholt 1971: 131—132〕。つまり、男性はある支払いをすることにより、自分のイエに妻を居住させ、子供を自己のものとすることができるわけである。

ノルトホルトと同様の指摘は他の地域でも行なわれている。「(中央ブラジルインディアン)の母系制は妻方居住の累積に基づく誤解であり、妻方居住は基本的なのであるが、『出自』の概念は中央ブラジルの変差の理解あるいは記述には役立たない」〔Maybury-Lewis 1979: 304—305〕。

実は、「父系」の東部テートウムでも事情は北部・南部テートウムとさほど変わらないのである。ヒックスによれば、父系・父方居住になるか、母系・母系居住になるかの転回点(*pivot*)は婚資の有無にあるとされる〔Hicks 1976: 83〕。婚姻には次の二種類がある。

- (1) $\langle hafoli \rangle$ 型——婚資を支払い、父系出自、父方居住になる。夫方親族と妻方親族の間に姻戚関係が結ばれる。
- (2) $\langle habanu \rangle$ 型——婚資を支払わない。母系出自、母方居住になる。この型の婚姻はしばしば観察されるが例外的とみなされている。夫方親族と妻方親族の間には姻戚関係が結ばれない〔Hicks 1976: 83〕。

このように、婚資の有無と居住が関連する社会は東インドネシアでは少なくない。セラム島で調査を行なったヴァレリオ・ヴァレリはこの状況を「出自は婚姻給付に従属する」〔Valeri 1980: 183—184〕と表現している。こうした点からみると、「出自」という概念が東インドネシア社会

の記述・分析に適当なのか否かを検討する必要があるように思える。ヒックス自身も、「出自」は重要ではあるが、テートウム社会を「父系」や「母系」ということは誤解を招く、と主張しているのである〔Hicks 1975, 1978: 85—91〕。以上のことを念頭においてより詳細に事例をめぐりみる。

ヒックスが調査(一九六六—六七年)を行なったのは、チモール島中部カラウバロ(Carubalo)王国内のMamihak村である。当村は主として貴族からなり、三二のハムレット(小村)に分割される。貴族と平民は相互の通婚が不可とされる。各ハムレットには一—二のイエ(*uma*)が存在する〔Hicks 1978: 86〕。また、「父系」クランが存在し最大の外婚単位であるが、実際はリネージが外婚単位となる。出自集団ではないが、ハムレットが外婚を維持している最大の集団となる〔Hicks 1976: 81〕。

しかし、この「父系」の意味するところについては、いささか注釈を必要とする。すなわち、女性は誕生という事実によって自動的に父親のクランに帰属するが、男性は単に潜在的な成員権を得るのみである。正式な成員権はその男性が婚姻を行うときに認められたり、認められなかったりする。男性が帰属を認められる資格のあるのは、父親のクランのみである。ある男性が結婚を希望すると、彼が成

人してからの記録が調査される——潜在的男系成員として行動したか、特殊な儀礼の遂行の仕方を知っているか、年長者を尊敬しているか、起源神話を暗唱できるか。以上を総合して判定が下され、リネージから婚資が支払われると、その男性は父親のクランへの加入が正式に認められるのである。テートウム社会では、クランに所属しない人間は「ヒト」ではない。何の権利・義務も持たず、社会的には存在しないとみなされるのである。婚資を集めることに失敗したときは、とるべき道が二つある。一つは結婚を延期し、その間に自らの行動を改めて、クランの成員としてふさわしいと認めさせること、もう一つは *habani* 型の婚姻を行うことである。後者の場合その男性には「親族」はいないことになり、極めて弱い立場となる [Hicks 1976: 99-100]。つまり、父方クランにも妻方クランにも帰属できず、前述したように社会的には存在しなくなるわけである。

次にイエをめぐる観念を見てみよう。家屋には前と後にそれぞれ戸口があり、前は「男の戸口」、後は「女の戸口」とされる。前者は成人男子及び思春期に達した少年のみが利用できる。後者は女性と乳幼児が利用する。家屋内の大部屋は *uma lolon*、イエの子宮、と呼ばれ、日常生活だけでなく儀礼の際も重要な場とされる [Hicks 1976: 61]。イエは女性、宇宙、水牛を象徴し [Hicks 1984: 33]、祖

霊と人間を結びつける場である [Hicks 1976: 56]。夫は外部の共同体に対しイエを代表し、一方妻はイエの「聖なる頭」であり、夫の祖先である祖霊に供儀を行う存在である。妻は祖霊と同様に「異人」なのである [Hicks 1984: 20]。すると、イエには同時に男性原理と女性原理が包摂されているようであるが、両者の関係はいかなるものなのだろうか。そのためにはテートウムの世界観を理解しなければならぬ。

テートウムではヒトと祖霊、男と女の対立が顕著である [Hicks 1984: 19]。「俗なる世界」(この世)は人間の居住するところであり、男性が主となる。「聖なる世界」(あの世)には男性・女性の祖霊が共に住んでいるが、女性の祖霊が優勢である [Hicks 1984: 20]。つまり、男性は「俗なる世界」、女性は「聖なる世界」と結びつく。しかし、この結びつきは絶対的なものではなく相対的である。日常生活(俗)では女性も男性と同様、俗である。但し、男性はどの場面においても俗であるが、女性は「聖なる儀礼」において、宇宙の聖なるものと結びつく。日常の場ではヒトは祖霊より優位にたち、聖なる儀礼や神話では祖霊がヒトより優位にたつのである [Hicks 1976: 20]。

イエのシンボルとして成員は全て「聖なる水差し」を所有している。さらに各イエには「聖なる皿」と「祖霊の袋」

が一つずつ保有されている。後者は家長が編むもので、祖霊の宿る場とされる。妻（夫方居住をする場合）は袋を持ってこないため、彼女の祖霊は夫のイエとは接触しないのである。末子（男性）が父親の袋を受け継ぎイエを継承する [Hicks1976: 63—84]。

何故末子なのであろうか。それは既に述べたように、イエが「女性」を象徴しており、兄弟の中で「女性」と密接に関連を持つのは末子であると考えられているからである [Hicks1976: 65]。

この点をさらに追求してみよう。末子は両義的な存在で、男性でありながら「女性」、「女性司祭」、その他「雨乞師」、「妖術師」などに類比される。また、年長シブリングは男／女によって名称が区別されているが、末子は男女とも *ahn* という単一のカテゴリーに分類される [Hicks1984: 100]。さらに、儀礼の場では末子は「女性」とみなされ、女性の代役として行動することができるのである [Hicks 1985: 32]。

末子の重要性は神話によっても語られている。これはある神話の冒頭である。かつてある老父母に7人の息子がいた。そのうち6人の名前は知られていないが、末子の名前のみが伝えられているのである [Hicks 1984: 24]。

ここまで末子の重要性を強調してきたが、末子のみが全

てを相続・継承するわけではない。末子は「聖なる財」（非物質財として例えばある種の役職への権利、物質財として家屋）を継承し、年長の兄弟は「俗なる財」（非物質財としてある種の役職への権利など、物質財として例えば豚）を、特に最年長の者が最も多く継承するのである [Hicks1984: 100]。

ここでもまた末子—聖の連関が強調されているわけである。ところで、「母系」の北部・南部テートゥム社会ではどうなのだろうか。興味深いことに、南部テートゥムでは女性末子がイエを継承するのである [Hicks1984: 100]。ここに、「父系」の東部テートゥムと「母系」の北部・南部テートゥムを統一的に理解する鍵が含まれているようである。末子という両義的存在を媒介として、「父系」、「母系」という両極に位置づけられる社会が、同じ「論理」（末子—聖）によって統合されていることが予想されるのである。もっとも筆者は北部・南部テートゥムの資料を細かく検討していないので、今の段階ではあくまでも推論にすぎないが——。

最後に「出自」について考えてみよう。清水昭俊は父系と母系を両極に、両系・非限定的双系を頂点とした「出自形式の三角形」を用いて出自形式の近遠関係を示している [清水 1985: 22]。それに従えば、東部テートゥムは

「父系」というよりも「準父系的複系」(quasi-agnatic ambilineal)、北部・南部テートゥムは「母系」というよりも「準母系的複系」(quasi-uterine ambilineal)に相当するだろう。

他のチモール島諸族においても、父方、母方のどちらにも帰属し得る可能性が残されている場合が多い。例えば、北部・南部テートゥムに隣接するアトニでは、父方の出自集団に帰属する者は「男性」、男のイエの人間」、母方の出自集団に帰属する者は「女性」、女のイエの人間」と呼ばれるのである[Cunningham 1967: 7]。ここでは母方帰属が父方帰属に擬制されず、明確に区別されていることに注意しておきたい。

チモール島諸族の社会構成を記述・解釈するためには「出自の文化的媒体」「清水一九八五・一七」により注意を払っていく必要があるだろう。そこで要求されるのは身体的関係についての民俗的知識であるが、東インドネシアの調査報告はその面に関しては残念ながら未だに「薄く」と言わざるをえないのである。

(一) 本稿は、比較家族史研究会第八回研究大会(一九八五年十月九日、東京都立大学)において「東インドネシアの家と女性」と題して報告した中から、紙幅の関係で、テートゥム族の事例のみを取り出して、加筆・修正したも

のである。

(2) 東インドネシアのイエ概念の定義、その他の事例については拙稿「遠藤1985」を参照していただきたい。

(3) 女性はホテル(キンマ)と、男性はアルカ(ビンロウジュ)と結びつけられる[Hicks 1964: 35]。この意味で、ビンロウジュの実をキンマの葉でくるんでかむという、テートゥムに限らずインドネシアで広範に観察される行為は象徴的である。ホテルとアルカは儀礼の際にも重要である。

(4) 7はテートゥムにとって聖数である。

引用文献

- Cunningham, C. E., 1967: Recruitment to Atomi Descent Groups, *Anthropological Quarterly*, 40: 1—12.
- 遠藤 央・一九八五「イエ概念の可能性——東インドネシアの事例を手がかりとして」『社会人類学年報』第十二巻、弘文堂。
- Friedberg, C., 1978: The Development of Traditional Agricultural Practice in Western Timor. in Friedland, J. and M. J. Rowland (eds.), *The Evolution of Social Systems*. Pittsburgh: Univ. of Pittsburgh Press.
- Hicks, D., 1974: *Laver la jambe du buffle: un rite tetum*, *L'Homme* 13: 57—72.
- Hicks, D., 1975: *La compensation matrimoniale chez les*

- Tetum, L'Homme 15 : 55—65.
- Hicks, D., 1976 : Tetum Ghosts and Kin: Fieldwork in an Indonesian Community. Palo Alto: Mayfield Publishing Company.
- Hicks, D., 1978 : Structural Analysis in Anthropology: Case Studies from Indonesia and Brazil. St. Augustin: Anthropos Institut.
- Hicks, D., 1984 : A Maternal Religion : The Role of Women in Tetum Myth and Ritual. Northern Illinois University, Center for Southeast Asian Studies.
- Hicks, D., 1985 : Conjonction féminine et disjonction masculine chez les Tetum. L'Homme 94 : 23—36.
- 鍵谷明子・一九八二° 「インテネットの女」・綾部恒雄編『女の文化人類学』弘文堂°
- Maybury-Lewis, D. (ed.) , 1979 : Dialectical Societies. The Gê and Bororo of Central Brasil. Cambridge: Harvard Univ. Press.
- Nordholt, S., 1971 : The Political System of the Atoni of Timor. The Hague: Martinus Nijhoff.
- 清水昭俊・一九八五° 「出自論の前線」・『社会人類学年報』第十一卷° 弘文堂
- Valeri, R., 1977 : La position sociale de la femme dans

la société traditionnelle des Moluques Centrales. Archipel 13 : 53—79.

Valeri, V., 1980 : Notes on the meaning of marriage prestations among the Huanlu of Seram, in J. Fox (ed.) The Flow of Life. Cambridge: Harvard Univ. Press.

(東京都立大学・社会人類学)